

平成28年度 第2回社会教育委員会議概要

- 1 日 時：平成28年8月30日（火）10：00～11：50
- 2 会 場：小田原市役所 議会全員協議会室
- 3 委 員：木村議長、有賀委員、角田委員、柏木委員、齊藤委員、瀬口委員、長峯委員、深野委員、益田委員、宮内委員
- 4 職 員：栢沼教育長、関野文化部長、安藤文化部副部長、杉崎文化部副部長、大木生涯学習課長、大島文化財課長、古矢図書館長、尾沢スポーツ課長、山崎子ども青少年部長、北村子ども青少年部副部長、石井青少年課長
（事務局）
濱野生涯学習担当副課長、高橋生涯学習係長、松本主査、渡邊主査
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

1 委嘱状交付

栢沼教育長から委員に委嘱状を交付した。

2 教育長挨拶

栢沼教育長が挨拶をした。

3 委員紹介及び職員紹介

資料1の名簿順に委員に自己紹介していただき、次に職員が自己紹介をした。

4 正副議長の選任

仮議長に文化部長を立て、議長、副議長を選出した。

【仮 議 長】 正副議長は、小田原市社会教育委員会議規則第2条により、「委員の互選による」となっているが、選出方法等ご意見を伺いたい。

【深 野 委 員】 事務局案は、どのようなものがあるか。

【生涯学習課長】 事務局案としては、議長には、前任期の会議でも議長を務め、活発な意見交換を経て答申を取りまとめていただいた木村委員に引き続きお願いできればと考えている。また、副議長には、社会教育・生涯学習分野を専門として研究し、前任期の会議でも毎回の確なご意見をいただいた、今日には欠席だが、笹井委員が適任ではないかと考える。

【仮 議 長】 今、事務局から、議長に木村委員、副議長に笹井委員、という提案があったが、いかがか。

(「異議なし」の声あり)

- 【仮議長】 本日、笹井委員は欠席だが。
- 【生涯学習課長】 笹井委員には、後日、確認させていただく。
- 【仮議長】 委員の皆様のご承諾をいただいたということで、承認とさせていただく。それでは、承諾をいただいたので、議長を木村委員にお願いしたいと思う。ここで、正副議長が決まったので、これからの議事の進行を木村議長にお願いしたいと思う。
- 【木村議長】 3期5年目に入ったところである。社会教育というのは、なかなか難しく、これだというものがない。やはり、皆さんでまとまって答申を出すと、また、問題は答申を出した後、それが本当に実行されているのかどうか、なかなかその辺まで我々も今まで検証というか、答申を出したものが、こういうふうに活かされているということが、なかなか我々の方には入ってこない。できれば、これからは、答申を出したものについて、行政側の方も真摯に対応してもらって、委員の皆さんに1つでも2つでも、目に見えて委員の皆さんに伝わると、委員の皆さんもやる気が出てくると思っている。これから、協議事項等あるが、今年度は、諮問をいただかないで、自分たちで今度は考えていこうというような形になろうかと思う。今までは、行政側から諮問が出て、それを皆さんで討議をして、最終的に答申を出すという形で、ここ2期はそれが続いてきた。今回は、皆さんでいろいろなテーマを決めて、1つまとめれば、それを主として皆さんと会議で討議をしていきたいと思う。なにせ社会教育は大変難しいので、今日は齊藤委員もいるので、その辺もまた皆さんと勉強していきながら、いいテーマといい議論ができればいいのかなと思っている。どうぞよろしく願います。

5 報告事項

(1) 社会教育事業の結果及び予定について(平成28年7月～11月)

資料2に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。

瀬口委員から、「図書館事業の中に9月9日から4日間、「布の絵本づくり講習会」があるが、私と同じように小さい子どもを持っている母親は、皆参加したいと言っているが、託児が2歳からである。布の絵本というのはだいたい0歳から1歳の子がとても興味を持つが、やはり針仕事なので、子どもが小さいから2歳からの託児になっていると思うが、針ではなくベルトだったらボンドとかでできると思うので、母親のそばでハイハイさせながら布の絵本を作れたらいいのではないか。それなら参加したいという声がたくさんある。また、2歳からの託児であれば、逆に社会復帰、職場復帰していて、平日4日間参加したいが、そのために職場を休むわけにはいかないので残念だという声をきくので、土日とか祝日にちょっと時間を長くして、旦那さんに子

どもを預けるなり、どこかに託児をして、2日間くらいで開催してもらいたいという声がある。」との要望があった。

6 協議事項

(1) 附属機関等への委員の推薦について

生涯学習課長から資料3に沿って説明した。小田原市明るい選挙推進協議会委員については深野委員、小田原市青少年問題協議会委員については角田委員にお願いすることです承を得た。

(2) 社会教育委員の活動及び今後取り組む研究調査テーマについて

生涯学習課長から資料4、5に沿って説明した。神奈川県社会教育委員連絡協議会総会で配布された「社会教育委員活動のためのハンドブック2016」を各委員に配布することとなった。

【木村議長】 これからのテーマを皆さんで討議していきたいと思う。約1時間くらいあるので、生涯学習課長から話があったように、今日テーマを決めることではなく、皆さんの意見等を聞いて、いろいろな意見を出していただいて、皆さんで1つにならないといけないのかなと思っている。資料5にもあるように神奈川県下の他の市町村の状況等もあるので、小田原市だけではなく、皆さんの意見で1つにまとめていきたいと思っている。これからは、皆さん随時、発言をお願いしたい。

【深野委員】 社会教育委員の研修会には、なるべく出席するようにしているが、そういうところに出て、グループ討議もやるが、そのときにいろいろな市町村の社会教育委員の方と決められたテーマで話をするときには、随分、町によって違うと思う。真鶴町などは典型的な例だと思うが、1校の小学校と1校の中学校しかないという中で、社会教育委員というのは、具体的に何かの活動をしている。会議というのではなく、テーマを決めて、今年度はこういう活動をしよう、委員としての具体的な活動をしている。そこで、翻って自分のことを考えてみると、社会教育委員としては、何もしていないなということを感じる。それが何なのか、ずっと引っかかってきて、やれと言われてもなかなか難しいと思う。小田原市は、やはり19万5千人の人口を抱えていて、数万の町とは規模が違う中での社会教育委員といっても、具体的な何か活動できるような状況におかれていないのではないかという気がする。というのは、やはり市の中で非常にいろいろな団体、市も含めていろいろな活動がされている。敢えて、小さな町のように社会教育委員自身が乗り出して、何かを働きかけないととても人手が足りないというのでは、ちょっと状況が違うのではないかという気がする。だ

から、真鶴町みたいに社会教育委員がもっと積極的にどんどん具体的な活動をすべきだというには、私には思えない。小田原市の社会教育委員というのは、そのようなものと役割が違うのではないかと思う。そうすると、一体何をするのか、こういう数ヶ月に1度の会議に出て、意見を言えばそれでいいのかということである。一応、この役割だけを見る限り、それでもいいのかなと思うが、問題はそこの中の中身で、何を話しているのかというのが問題なんだろうと思う。7月までの間に、答申を27年度、28年度議論したわけだから、ここの中の3番目に学びを推進するための仕掛けというので4項目に集約されたわけなので、このような中で、一体社会教育委員としての役割は何をしていくのか。例えば、学びのコーディネート機能の強化を行政なり、学校でもやっているだろうし、いろいろな団体でもコーディネーターは非常に重要だからやろうという話は出ているだろうと思うが、それでは、社会教育委員としてコーディネート機能の強化というのを、それをまた支援する役割としてどんなことができるのかとか、後、なかなか難しい学校との連携という意味、行政的な縦割という中をどうやって横串を通していくのかということの意味においても、何か社会教育委員としての役割があるのではないかと、何かそういう切り口で議論をしていったらどうなのかなと思った。

【木村議長】 挨拶の中でも言ったが、せっかくこういう答申を出したのだから、今、深野委員が言うように、その中からピックアップするなり、いろいろなやり方があるかと思う。その前の平成26年に答申を出したものについても、あれば前回のを事務局で出してもらって、その中でピックアップをして教育委員会にぶつけるのも1つの手かなと思っている。最終的に小田原市は、今まで何件かは助言であったり、提言等も出しているが、この2期は、先ほども言ったように、諮問があつてそれを皆さんで討議をして答申を出して終わるということだが、それは終わっているので、できれば私もそうだし、深野委員が言うように、せっかく自分たちがまとめた答申がどういうふうになっているのか、それを検証するのも、また問題提起としてやるのも1つの手かなと思っている。後は、各委員さんからいろいろな意見を出してもらって、それを1つにまとめていきたいと思っているので、今、深野委員の考えていることを述べていただいたが、どなたか次にどうか。

【有賀委員】 研究調査テーマについてということで、資料にあるがそれぞれの自治体の規模とか地域性とかあるので、やはりテーマは様々だなと感じた。私も昨年度、真鶴町の研修会に参加して、小さい町ならではの活動に触れることができたかなと思った。真鶴町のテーマとしては、具体的に「公民館・図

書館・博物館の活動と社会教育委員の役割」ということで、現場で実践する社会教育委員の姿が伝わってきた。その中で、「図書館の有効利用に向けた放課後子ども教室」の紹介というのがあり、自分も子ども教室の関係で関心をもって聞いていた。図書館ということで、いろいろ読み聞かせなどもやっているが、本当に様々なメニューを展開していて参考になった。ただ、今自分は、小田原市の方でやっているが、図書館ではなくて、学校を中心とした学習支援を軸にしてやっている。そういった子どもにとって学校現場でできることは、すごく参加しやすい体制なのかなということを感じながら、発表を見せていただいた。これから学校を軸とした展開ということで答申の方もまとめたが、各自治会に存在する学校を軸とした、何か展開ができればなと思っている。

【木村議長】 今、有賀委員が言ったように答申の中にも書いてある新しいコミュニティというか、建物を作ってそこに皆さんに来てもらうということは、もうこれから先ほとんど無理だろうということで、今ある学校をこれからそういうコミュニティなり、皆さんが使えるような状況に持っていった方がいいだろうという形で、答申の中には入っている。それが今日、酒匂中学と桜井小学校の校長先生が来ているが、学校関係でいくとなかなか空き教室ができてくるまでは、まだまだ時間がかかると思う。これが答申を出したからすぐ、それをやるということではなく、やはり地域と一緒に学校もやっていくということであれば、学校も生徒が少なくなって空き教室ができたときには、何とかそういう方法で使えていけないのかなという形で答申の中には盛り込んである。これが今年とか来年にやれということではなく、やはり今ある公民館であったり、生涯学習で使っている国府津学習館であったり、いろいろなところも老朽化が進んでいる。それをまた壊して建て直すことはこれからはもう無理だろうということになると、やはり学校を利用させていただいて、やっていった方がいいだろうという意見で答申の方には出ている。それが今、有賀委員が言ったところなので、これから皆さんといろいろ討議をしていかなければいけないと思っている。

【齊藤委員】 今までの議論とは違うことを申し上げる。今、社会教育委員は、12人中6人が女性である。私は、いろいろな委員会に出ているが、女性が多い。50パーセントを占めている委員会は珍しいかなと思っている。それは別の話だが、「子どもにやさしいまち」をつくり出す、みんなで地域の方とつくり出す、ということと、もう一つは、「地域の文化伝承を大切にすまち」というこの2つが私は大事かなと思っている。生涯教育の方向性というのは、実はとても揺らいでいる部分がある。しかし、小田原市には独自の文化がある。(先日相模原で開催された全国公民館大会で)神奈川県

で鎌倉に次いで2番目に小田原市が紹介されていた。「神奈川県は面白いまちだ」と副知事から、「城下町の小田原」と紹介があった。私は、小田原市民ではないので、新興住宅の文化のない地域に住んでいるので、そこから見ていると、本当に城下町のプライドや文化財が多い。そして、学芸員も多い。いろいろな豊富な独自の文化があるので、それを子どもたちに地域のプライドとして根付かせるというか、そういうことがあるといいなと思っている。もうすでにやっていることだと思うが、小田原から出て行ってしまふ子どもが多いと思うが、「やっぱり小田原はいいね。」というように思えるようなまちができるといいなと思っている。今後、より学校と地域の連携が進んでいくということと、もう一つは、グローバル化に向けた動きが教育の大きな課題になっている。グローバル化だけでなく、ローカル化、地域を大事にするということとグローバルに向けたと両方で「グローカル」という言い方があるが、こういうことも大事になる。勝手ながら、私が思うのは、もし私がここの親だったら、子どもたちに国際性を身に付けさせたいと思うと同時に、自分たちの地域の伝統や文化を、例えば、小田原駅に溢れかえっている外国人に箱根にすぐ行かないでここに留まって、子どもたちが外国人に「小田原ってこんなにすごいところだよ。」というおもてなしができるとか、そういうことができるような子どもになってくれたらうれしいなとか、勝手な理想だが、いつも小田原駅に来ると思ってしまう。「子どもを大切にする、子どもにやさしいまちづくり」、これは国際的にいわれているキーワードでもあるが、こういうようなことと、「地域の伝承文化、伝統文化を大切にするまちをつくる市民と子ども」ということをやったらどうかなと思う。

【木村議長】 地元に住んでいるとなかなか分からないところがあるので、外から見てもらうとまた違った目で見れるのかなと思う。貴重な意見、ありがとう。

【角田委員】 また、全然違った、意見ではないかもしれないが、この会議が終わった後、私は、地区公民館へ行かなければいけないが、時々、地区公民館の方へ出向くが、小さな地区公民館だが、社会教育委員としての役割は全然感じないで、ただ役割として出向くが、この公民館は、地域の中で、とても大きな役割をしているなと思って、この答申を出したときに、答申の中の文言としては、そんなに大きな役割は書いてないかもしれないが、地域としてはすごく大きな役割をしているなど、いつも行く度に思っている。やはり地区公民館は、大きな社会的な役割をしていると思っている。今ここで、このように窓の外を眺めていると、大きな建物があるが、私は山を越えて来るので、木の中で過ごしているのも、昨日も警報の音が聞こえてきて、台風がきて川があふれるのかと思ったら、そうではなくて、「猿が出るの

で気を付けてください。」だった。「駅の近くまで猿が出るので、地域の方は窓を閉めて外に出ないよう気を付けてください。」と言われるようなそういうところで生活していて、こうして山を越えてここに座っているが、そういうところで、社会教育委員は何をするのかと一瞬考えたりするが、この会議が終わって地域に行くと地区の方たちと違う役割で接すると、また違った役割をするのかなと思うと、それがまた、1つのくくりかなと感じている。これも1つの社会教育委員としての役割かなとふと思う。こんなたわいもない話である。

【木村議長】 確かに、角田委員が言ったように、自分がここで議長をやっているから地域に行って社会教育委員として何をやっているかといわれると、たいしたことしていないのかなと思う。ここに来て年4回、皆さんと議論して今まで答申を出す、そちらに目を向けているので、真鶴町の話の中でも、やはり小さいところは、自分たちが動かなければいけないというところがあるかもしれないが、小田原市は、先ほどの深野委員の話のなかで19万5千の中の社会教育委員で、私も一番初め神奈川県へ行ったときに、「社会教育委員は何をやったらいいのか」と話をしたら、いちばんとつき易いのは防災だという。防災といっても、小田原市は自主防災もあるし、いろいろなことをやっているのに、何でまた社会教育委員で防災をやるのかなと思った。一番取り組みやすいのが防災だという話を聞いたことがある。そういうことを考えると、皆さんの意見をこれから聞くが、こうやろうというのは、なかなか出てこないと思う。今日は、皆さんの屈託ない意見を出していただいて、また、最後に事務局の方でまとめてもらうか、事務局も何か案は持っているだろうと思うので、あまり事務局の話を聞いていると、また何か答申みたいなことになってしまうので、できれば、皆さんの意見の中を1つにまとめたいなと思っている。

【柏木委員】 私は育成会を代表しているが、私が曾我小学区で、小田原市内で一番小さい学校で、今年コミュニティ・スクールの委嘱を受けた学校で、その運営委員をやっているので、今までの学校評議会とは違った形で運営をしていかなければいけないのかなと各委員で今勉強中である。先般、神奈川県の社会教育委員の研修会があり、本当にそのテーマで研修会があって、参加してきた。そうしたら、私が知りたいものとちょっと違う方向のことだったが、先ほど、深野委員が言っていたように、グループ討議のときには、県西でまとまっている。そうすると、小田原市は足柄下地区の方たちと山北や上郡の人たちと、やはり人口規模も違うし、行政のあり方も違う人たちと、情報交換はできても、議論にはならないかなと思う。今度、事務局にお願いしたいのは、神奈川県のグループでの研修のときに県西でまとめ

るのではなく、同じ人口規模だとか違った形で、いつも県西ばかりではなくて、回していただくと各市町の様子も分かるのかなと感じた。今まで答申とか社会教育委員の活動についての話があったが、今、社会教育と生涯学習は、何なんだろうなということで全体の答申をちょっと読んでみたいという気持ちがある。昔は生涯学習部があって、今の青少年の育成をやっていて、一番感じることは、家庭教育のあり方をきちんと示すことも大事なのかなと思う。以前は、小学校や中学校のPTA、家庭教育学級というのをPTAの運営でお願いをして開講していた時代が、20年くらい前にあった。そういうものが今あるのかどうか分からないが、そういうものをもう少し、きちんと基本的なことを学習してもらうような環境づくりも改めて必要なのかなと思っている。たまたま、私が曾我の育成会をやっているが、今までは男性ばかりだったので、ただ与えられた行事をやるだけという形であまり育成会に理解が得られなかったのかなと、またそれでよかったとは思いますが、たまたま主婦で子育てをした経験で女性、そういう役割でおばあちゃんの立場として、地域を子どもを見守る活動ができないかということで、農協婦人部などをお願いをして、ともかく声かけや小さなお世っかいを少しやっ払いこうという動きで展開しているが、基本的には小田原市の社会教育委員は他のところに惑わされずに社会教育に関する諸計画を立案すること、これでいいのかなと感じている。

【木村議長】 研修会もできれば同じ人口規模のグループとしてその中で話をしたいという話があったので、これは、また、私が神奈川県の記事会等があったときに、向こうの方には伝えておきたいと思う。

【宮内委員】 私も先日、神奈川県の記事に参加して、社会教育委員とはどんなことなのかということで、出席した。そうしたら、深野委員や柏木委員が言われたように、具体的な活動をしていたり、学校でのコーディネーター的なことをやっていたりというようなことで、分かった部分はあったが、学校現場でやっていることとどう違うのかとか、なかなかその辺のところの社会教育委員に対する理解が深まったようで、また新たに分からなくなった部分もあったというような感想を持った。自分が勤めている桜井地区は、二宮尊徳先生の教えというような一つ芯が通ったものがある、それによって地域と学校のつながり、そして、子どもの育ちというようなことを目指している。そして、地域は学校によく協力してくれるので、自分としては子どもたちが、いかに地域に貢献できるか、そして、地域を子どもたちが誇っていけるか、そして、その教えをどこかで体の中で感じてというようなことで、子どもたちが地域のためにというようなことを、学校としてはやっもらうばかりではなく、何ができるかというようなこ

とで、教員も考えながら、校長としてそういうような具体的な姿というように、できるだけいろいろな地区の行事への参加だとかお祭りというように、子どもたちが参加できるかなというように考えながら、そして、地域の方々にもっと学校を知ってもらい、学校のためにがんばろう、学校もがんばりますというように、やっている。こういう立場に立って、学校として、また、子どもたちの育ち、そして、子どもたちが将来、地域から離れていく部分が多いと思うが、その中でも小田原、そして、神奈川、日本、世界というように、そのときにここで育ったものが何か役立っていく、そのような子どもたち、そして、地域、学校がくれたらなと思っている。このような機会を、また、新たな自分の視野の広がりというように生かしていけたらなと思っている。

【益田 委員】 先ほどの齊藤委員から話があったように文化継承のまちをどんどんアピールしていくような子どもが育つまちがいいという話を聞いたときに、平成26年の答申のときに、小田原市らしさというのを前面に打ち出した答申を出していて、このときに、やはり小田原市の文化を継承していこうという話があったと思う。小田原市らしさを前面に出していたと思うので、その辺を考えていくと、平成26年の答申も生きていくのではないかなと思う。私のPTAの立場から言うと、社会教育を行うために何が大切かというのは、やはり人材が、何よりも人材が大切だということを長年やっていて思っていて、やはり仕掛ける人が必要だし、リーダーがいないと何もできないというのを身にしみている。今回の答申でも、長期的な人材育成などの行政による学びをサポートする取組も必要だとか、いくつかキーポイントに書いてあるが、その辺のところをもうちょっと私としては深めてほしいなと思う。今、青少年課でジュニアリーダーの育成とか子ども会の人材育成を何十年もやっているが、そこで終わってしまって、うまく大人になるまでつながっていないような気がする。せっかく子どもたち6年生とかにジュニアリーダーになるための研修とかを行っていても、なかなかうまくそれがいっていないような気がする。それをずっと大人までその気持ちをつなげていってもらえるような仕組みづくりを小田原としてやっていただけたら、もうちょっと小田原に愛着のある子どもたちが育っていくのではないかなと思う。

【木村 議長】 今、益田委員が言ったようにそういうことができるのがコミュニティ組織というか、私は社会教育とコミュニティは一体的なものと思っている。組織の中の子ども会にみんなが入って、それがつながっていくといいなと思っている。齊藤委員に言わせると、違うよと言われるかもしれないが、やはりコミュニティというのは、地区公民館をはじめとしてコミュニティが

できてきた。それが地域にかたまりを作りながら自分たちのところでいろいろなことを地域でやっている。それが今、小田原市でやっているのが組織を作ろうという形で連合体で動いている。こういうものをいかに活用して、今、益田委員が言ったようにせっかくできたリーダーがつながっていないというのは、そういうコミュニティの中に入ってもらいながら、一緒に活動していく中でできてくるのかなと思う。

【長 峯 委 員】 私自身が、社会教育というものがどこまでやっていくのか、自分の中ではっきり明確なものがないので、ちょっと分からないが、学校現場にいる者として、感じていることを言わせていただくと、学校現場としては、地域の人たちが学校の方にどんどん入ってきていただきたいという気持ちがある。例えば、今、酒匂中学校には図書室があるが、そこは学習もできるようになっており、ちょっとしたスペースもあるので、こんなところをどんどん地域の人にも利用してもらいたいと思うし、空き教室ができてきているのも事実である。以前は8クラス規模あった学校なので、それが今、5クラス規模になってきているので、そういったところも、利用するのも1つなのかなと思う。そんな中で、地域の人と子どもたちが触れ合える、そうすることによって、自分はいい地域にいるのではないかと、温かい地域にいるのではないかとというふうに思えるのではないかと、自分は思っている。そうすると今度は、子どもたちが地域に出ることも多くなるのではないかと、ただそのためには、いろいろな仕掛けが必要になってくると思う。そこでいくと、ここに連携をコーディネートする人材の育成支援が必要であると書いてあるが、全くそのとおりではないかと思う。後、学校教育の現場として危惧するのは、先生方がそこに多く関わるのは困ってしまうだろうと思う。いろいろな教育、～教育、～教育とかが学校の方にはどんどん入ってきている中で、そこまでやるのかみたいな形になると、せっかくのいいものが、やはりだめになってしまうのかなと思うと、地域に関わる方が、地域に居られる方がそこでコーディネートしてもらって、子どもたちと地域をつなぐ、そういった形を作ってってもらえれば、学校が地域の中心になるということが、私はとても賛成で是非学校の方も利用していただければなと思う。ただ、それについては議論を重ねていかないと急にきた場合は、学校の方は、戸惑ってしまうのではないかと危惧はしている。

【木 村 議 長】 本当に長峯委員のように言っていただくと、開かれた学校、地域と一緒にやっていこうという教育長からの言葉もあるので、そういうことをいろいろ議論しながら、先生に何かを押し付けるというのは、もう限界だと思う。そうではなくて、地域には地域のリーダーがいるので、その辺を

これから皆さんと議論しながらやっていきたいなと思っている。

【瀬口委員】 私が母親として娘たちにどんな子に育ててほしいかと思ったら、オリンピックに出たり、ノーベル賞を取ったりとか、そんな立派なことではなくて、ある程度の年齢になったら、きちんと納税できる子になってほしいと思っている。そのためには、小さいときに、どんな大々的なイベントに参加したとかではなくて、日々の生活をどのように愛されて、守られて暮らしていけるかに係わっていると思う。私の小さい頃とは違って、今、SNSの発達によって子どもたちはとても生きにくくなっているところもある。文章などでイントネーションの上げ下げによって全然捉え方が違ってくる。例えば、メールとかで、「これ、かわいくない」という文章で、「かわいくない（上げ）」としたら、すごくかわいい、うれしいとなるが、「かわいくない（下げ）」と下げて聞かれたら、せっかく私がプレゼントしたものを、この人はかわいくないと言っていると思って、その怒りをぶつけてくれればいいが、ぶつけないですぐブロックして、相手と連絡が取れなくなってしまう。そのことについて、「なぜ」とも聞けないし、自分で誰かにも相談できない、そのことによって悶々としてしまって学校に行けなくなってしまい、家に閉じこもってしまったり、また、反社会的な方になってしまったりする子が少なからずいる。そうなったときに、今、学校に行けないけど、家にも閉じこもってもいたくない、でも親には心配かけるから言いたくないし、担任の先生に言ったら、もしかしたら、内申書に関わるかもしれないとか、いろいろな思いを抱えている子がいたら、「何にも理由を聞かないよ。でも居場所がないなら、この場所においでよ。」と心が復活するまでこの場所においでという場所を、公民館であったり、図書館であったり、中学校区に1箇所だけでもそういう場所があれば、いいのかなと思う。その場所が、そういう子たちばかりが集まるのではなくて、私のような子育て世代がいたりとか、おじいちゃん、おばあちゃんがいたりとか、そんな人たちとお茶とか飲んでいるところに、「何かあったら、おいで。」という、そういうプリントを学校の夏休みとかに出していて、平日、ふらっと来ていても、「どうして学校に行っていないんだろう。」とか言わずに「よく来たね。」とか言って、その子が、赤ちゃんでいるかのような癒しもあるので、抱っこしてくれて、ちょっと楽しんだりしてくれて、そして、何日か来ても、ぼろっと言ったら、「たぶんそれ、勘違いさせているんじゃないの。」と言ったら、「あ、そうなんだ。」と思って、元に戻っていけるような、そういう場所があればいいと思う。いろいろなコミュニティがあるけど、もしかしたら、お年寄りの方しかいけないのではないのかな、私のような年齢の人は行けるのかな、子どもは行けるのかな、どう

なのかなというところがあるので、いろいろな年代の人が集まってください、別に何をやるわけでもないけれど、何か一緒に話してもいいし、話さなくて隅にいてもいいよ、でも居場所がないならおいでという場所を作ってあげたいと思う。そうしたら、もし、私たちに言えなくても、居場所があるし、おじいちゃん、おばあちゃんに会いたくても会えないときでも、近くのおじいちゃん、おばあちゃんがかわいがってくれたら、すくすく育っていくのではないかなと思う。そういう場所をつくってほしい。自分は教員をしていて、一杯一杯だった。若いからといって、どんどん仕事がある。子育てもないでしょ、介護もないでしょ、部活もあるし、いろいろきて、一杯一杯なところにもっときたら、先生たちは大変だと思うので、先生たちもたまに、本当にちょっとした空き時間にふらっと来るだけでもいいし、ちょっと教科書や問題集を置いてくれたら、私は中学校くらいまで教えられますので、勉強したいといったら、教え、そういう地域の人が何かできる場所がいいのかなと思う。こんなイベントしますではなくて、ここにおいでよという居場所作りの手助けをしたい。そうしたら、子どもも救われるし、例えば、私が育児ノイローゼになったら、救われるし、一人のお年寄りの人が家に居て、一人で死んでしまうこともないのかなと思う。そういうつながりを作っていきたいと思う。

【木村議長】 今の話の中でも、最終的には先ほど私が言ったように、それはコミュニティ組織の中でいろいろ作っていくしかないと思う。これはやはり自分が住んでいるところで、みんなと顔見知りになり、悩みも聞いてもらえるし、そういうものは、やはり組織の中に入らないとなかなかできていかないのかなと思う。そういう形で小田原市の中では、26の連合単位で、コミュニティ組織が立ち上がって、その規模的なものは違うと思うが、私は富水だが、お子さんを連れてお母さんが組織に入ってきて、一緒になって活躍している人もいるし、そうすると、お父さんばかりみているのではなくて、子どもも連れて来ると、他の人がみてくれたりとか、いろいろなやり方があるかと思うので、是非、今酒匂もいろいろなコミュニティをやっているんで、機会があれば、是非、そういうところに参加してもらって、参加するという事は、地域をよくすることなので、そういうこともいいのかなと思う。

【深野委員】 今日、話を聞いて、私の発想と全然違う発想の話を聞いてとてもよかったなと思っている。納税できる大人になってほしいというのには、仰げ反ってしまった。できたら、国民年金の掛け金もちゃんと払える大人になってほしいなと、年金生活者としては思う。確かに、そういうことができない大人が増えているというか、若者が増えてしまっている社会のあり方とい

うものは、やはり基本的なところでおかしいというのは、先ほど、どなたかが言っていたが、基本的な部分をどういうふうに教育していくのかということだと思う。益田委員が言ったジュニアリーダー研修が大人につながっていない、これも非常にインパクトがあった意見だなと思う。我々も会社の中でリーダー研修を盛んに受けた。一時期、日本の社会というか会社の中ですごく流行った。今から思うと、みんながリーダーになってどうするんだろうと、グループの中でリーダーばかりになって、「俺が、俺が」になってうまくいかないということもよくある。リーダーとは何かというと、やはり情報を集めて、状況を判断して、決断し、集団としての行動を決めるという能力がリーダーだと思うが、別にそれをリーダーというふうに定義するからおかしいのではないか。そういうのは、人として生きていくには当たり前というか、持つべき能力なのではないかと思う。自分で考えて自分で行動できるという能力、これは、私も東北で大震災を体験し、震度7を体験したときに、会社の中で、我々も逃げるのに必死だったので、みんながどういう行動をしたのか知らなかった。それをインタビューして回った。そうしたら、やはり社員の皆さんが素晴らしい行動をしていた。それぞれが自分で判断して、自分で行動している。人間はそういう能力を持っているということが、危機においても非常に重要だし、もちろん危機だけでなく、日常生活の中でも、非常に重要なのかなと思う。だから、自分自身が、考えて行動する。例えば、地域でどんどん焼きなんかもしたりするが、よくお父さんが手伝いに来て、ぼーと立っているだけの人がいる。つまり、何か準備しなければいけないが、長い間それをやっている人は、どんどん始めてしまうが、新参者は何をしたいのか分からないという状況に置かれて、一旦、そういう体験をしてしまうと、もう二度と行かない。なんか門戸を閉じられているような印象を新参者は持つてしまうということは、私も経験があるが、別に地域にずっといてお祭りをやっていた人はそんな気はないが、やはりそこで、新参者はそういうふうに思ってしまうという傾向がどうしても出てしまう。自分自身で、何が必要なのかとか、尋ねていけばいいと思うが、しかし、お祭りというのは、やはりそこで最初にミーティングとあって、「じゃ、あなたこれやって。」とか計画的にやるということはやらない。そういうことがあるので、どうしても、なかなか開放的にならないという部分もある。やはり一番大事なのは、そういう場面においても、自分で積極的に関わっていけるような能力、そういうものをどうやって身に付けさせるのか、というところがないと、リーダー研修だけやってもしょうがないのかなという気がする。それは、地域がコミュニティ組織という話が散々出ているが、何が一番大事かとい

うと、子どもの教育もそうだが、今、リーダーをやっている人たちが、なんか本当に開放的になっているのか、地域に門戸を開いているのかということ、もう一度見直して、より多くの人、子育てのお母さんが参加するにはどうしたらいいのかとか、そんなことは、多分議論したことはないと思うが、そういう場をつくって行って、今リーダーになっている人たち、コーディネートしている人たちが、より多くの人、参加できるような場づくりをいったいどうやってやっていったらいいのかということも、きちんと教育していかないと、ジュニアのリーダー研修をやったきりで、そのまま途切れてしまうということにならないのかなと思う。大事なものは、むしろ大人こそもう一度学び直せと、それこそが生涯学習ではないかと思う。

【角田 委員】 深野委員のように理路整然と話せないが、私は、体育協会としての話をあまりしたことがないが、体育協会では、行事がいろいろあるが、その中で、中学生ボランティアを募集するが、行事ごとに中学生の方が随分たくさん応募してくれる。その中学生ボランティアは、多分、地域の少年リーダーの養成講座を受けているからボランティアに応募しようかなと思って応募してくるのではないかと思うが、行事ごとにたくさんの中学生が応募してくれる。それで、行事が成り立っている。その方たちがとてもよく積極的に働いてくれる。その方たちが少年リーダーの養成講座を受けて、筋道が立っているわけではないが、地域の中学生在が応募してくれて、行事が成り立っているわけなので、多分、ここからこういうふうに筋道が立っているわけではないが、子どもたちの中には身に付いているものがあるのではないかなと思っている。この9月の第3日曜日にも、行事があるがそこでも、子どもたちには手伝いをしてもらっているし、参加する方たちにも、赤ちゃんから子どもたち、それからお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも参加してもらっているので、とても助かっている。

【木村 議長】 事務局の方から何かあるか。

【生涯学習課長】 事務局の方でも皆さんの議論が出なければ、用意したテーマもあるが、皆さん、多岐に渡って意見をいただいたので、この中で整理させていただきたいと思う。いろいろとキーワードが出てきた。前期答申又はその前の答申、その中で地域と学校の連携、さらにはそこで子どもをどうするかということもあったので、そうしたところで整理して、次回で方向性というかテーマ、それに対してどのように今期中でスケジュールとして進めていくのかということ、さらにはそれに伴って、基礎的な資料もあろうと思うので、その辺を提示させていただきたいと思う。それについては、議長と、ここでいただいた意見を取りまとめて、テーマと方向性を相談して次回、案として出させていただきたいと思っている。今のキーワードを見て

いると、何となく方向性が見えてきている感じもあるので、その案に沿ってもう一度次回、議論を深めていただければと思う。

【木村議長】 皆さんの意見もたくさんいただいた。今、事務局の方から話があったように、次回の会議までちょっと方向性を事務局と相談をして、次回提出をしたいと思っている。それでは、次に「その他」で事務局、何かあったら、お願いします。

【生涯学習課長】 それでは、事務局から次回の予定を伝えさせていただく。具体的な日程は決まっていないが、11月下旬を予定している。調整のうえ、皆さんに報告させていただく。

【木村議長】 では、次回の会議は11月下旬を予定しているようなので、決まり次第、皆さんに早めにお知らせをしていただきたいと思います。それでは、本日の社会教育委員会会議はこれをもって閉会とさせていただく。委員の皆さん、どうもお疲れ様でした。